

Shibuya cast 7th Anniversary memorial booklet

Speaker:

Motoho Tanaka



Kei Wakabayashi



Kohji Inose



Listener:

Akiyumi Kumai



頼まれなかったことやちやうことを祝う

田中元子・若林恵・猪瀬浩平

聞き手.. 熊井晃史



Shibuya east 7th Anniversary memorial booklet

Speaker:

Motoko Tanaka



Kei Wakabayashi



Kohji Inose



Listener:

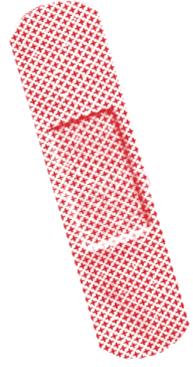
Akifumi Kumai



頼まれなくたってやっちゃうことを祝う

田中元子・若林恵・猪瀬浩平

聞き手.. 熊井晃史



Shibuya cast. 7th Anniversary memorial booklet

頼まれなくなつてやっちゃんことを祝う

田中元子・若林恵・猪瀬浩平

聞き手..熊井晃史

はじめに

「多様性を受け入れ、創造性を誘発する」ことを願って誕生した、渋谷キャスト。この冊子は、その七周年を記念して生まれたものです。4月28日にその誕生日を迎えるなかで、感謝の気持ちを改めて確認したりお祝いの機運を高めたり。記念日らしいことが頭に浮かんで来ますが、とはいえお祝いと言っても、そもそも一体、何を祝うべきなのでしょう。

「頼まれなくたってやっちゃうことを」というのは、それに対する一つの応えです。なぜか。それが、この社会に必要なと考えるからです。そのお祝い気分が、街に広がっていくことを想うからです。そのような気持ちだけが確信とも言えるもので、それ以外は暗中模索。「おせっかい」や「独りよがり」とは違うのか。同じなのか。手放してお祝いして良いものなのか。色々と逡巡が尽きないなかでも、たぐり寄せたくなる希望を感じてしまうのが正直なところ。ですし、まさに、頼まれなくたってやっちゃいたくなるような拍子がかかって、一歩二歩と踏み出して、そういった逡巡と希望を携えながら、田中元子さん、若林恵さん、猪瀬浩平さんにお話を伺いに向かった次第。この冊子は、その様子をそのままに記録していくというドキュメンテーションの体裁をとりました。取材を終えて今思うのは、踏み出して良かったということです。踏み出してみれば、自分の、生きるということと働くということが案外重なっていくもんだということです。

はじめに 6

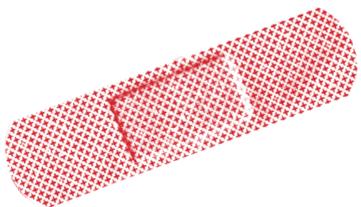
interview_1 16
頼まれなくなつてやっちゃうことこそがクリエイティブ
田中元子

interview_2 42
発注を考える 未来の奴隷にならないために
若林恵

interview_3 64
ボランティアの文化人類学
猪瀬浩平

100
終えて

頼まれなくなつてやつちやうことこそがクリエイティブ
田中元子



頼まれなくなつてやつちやうことこそが必要。これは、田中元子さんが様々な会議の場で、しばしば口に出される言葉です。「自家製の公共」「マイパブリック」「私設公民館」といったキーワードと活動を、もう何年も前から展開されてきた田中さん。とうなるかわからないけど踏み込んでみる。賭けてみる。そういった優しさや寛容性とも言える眼差しを周囲に向けてつつ、いつもなにかをエンパワーメントし続けているようにも感じます。同時に、物事のスタート、そしてゴールがどうあるべきかというところに厳しい審美眼があることもうかがえます。ご本人に、この口癖を紐解くところからはじめてみたいと考えました。

喫茶ランドリー

2018年に墨田区の住宅街に「私設公民館」として誕生した「喫茶ランドリー」。コーヒーやお茶、軽食はもちろん、ランドリー（洗濯機）や大きめのテーブル、アイロンやミシン、お裁縫箱や編み物道具なども。まさに公民館のように、リビングとして、読書室として、家事室として、工房として、そのときにしてみたいことができる場所。そして、「何もしたくない」という気持ちにもひらかれています。

田中元子「マイバブリックとグランドレベル」（晶文社）

「自家製の公共」づくりとして、「マイバブリック」という概念とともに、それが具現化されたプロジェクトを紹介。国内外の事例も紹介され、「1階づくりはまちづくり」ということが徹底的に「人の論理」であることを感じつつ、それが当たり前になる社会の方が圧倒的に居心地が良さそうに思

えてきます。

田中元子「1階革命－私設公民館「喫茶ランドリー」とまちづくり」（晶文社）

2冊目となる新刊。「喫茶ランドリー」は、多くの共感を呼び、「理念のフランチャイズ」が進んでいます。そんな「喫茶ランドリー」のつくられ方を（惜しげもなく）解説しつつ、今回も国内外の事例が多数。誰もが思わず何かをやってみたくなる。そんな気持ちを後押ししてくれます。「あなたとわたしの地平である1階とは、どうなっていることが、よりよいでしょうか」というあとがきにある投げかけが頭から離れません。



M .. ありがとうって言われたり、褒められたりする。人のためになってるな。なんか良いことしたんだな。そういう手応えはやっぱり嬉しいじゃない。でも、そこだけじゃないんですよ。その人が「頼まれなくてもやっちゃおうこと」っていうのは、その人の癖みたいなものでさ、それがあってこそものだと思ってるんです。例えばさ、会社の面接をして、新入社員として熊井さんを雇うとするじゃないですか。それで、熊井さんの癖とか個性を生かさないうで成果を上げる仕事をし

K .. ああ。

M .. で、そうやって言われているうちは良いんだけど、逆に言うと、褒められないとそこで辞めちゃう。

K .. ああ。

けど、他の人から有難うって言われることだけが目的になっちゃおうことってあるんですよ。

M ... 田中元子
K ... 熊井晃史

それぞれが健やかに生きる

K .. 「頼まれなくてもやっちゃおうことを祝う」。そういったフレーズって結構意識して発言されているんですかね？

M .. 無意識かもしれないけど、そういうことを言っておかないと、「報酬を得る」っていうことだけに集中しちゃうようになる気がするんですね。

K .. ああ。

M .. そもそも、そこだけが目的ではないじゃないですか。あくまで、この報酬っていうのはプロセスだし手段。仕事に向かうみんな、そもそもその目的を見失わないように「頼まれなくてもやっちゃおうことが大切」と言っているところがあるんですよ。

K .. 元子さんが言うところの目的って、もちろんその仕事ごとに設定した目標のようなものもある

かと思うんですが、さらにその先の、もう少し先の次元のお話をされていることもありますよね。

M .. そうね。私、基本的に全ての仕事で、「健やかに生きる」という目的に向かっているものだと思うし、そもそもそれが前提であるべきだと解しているんですね。なので、何て言うのかな、報酬を得たり期待に応えたりすること以上の目的がいつもあるよねって思ってる。

K .. 健やかな状態。

M .. うん。健やかさとは何かっていうとさ、外からのプレッシャーに応えていくようなこととは違うと思うんですよ。他の誰かの御用聞に徹するということじゃないじゃないですか。

K .. 御用聞。

M .. はい。私が、まちづくりとか、コミュニティに関わるような仕事をしているからかもしれない

なさいって言われたとするじゃん。それって、面接はなんだったのって思う。

K .. 人として扱われてない感じがしますね。

M .. そう。その人と一緒にいたくて付き合うんでしょって思う。そういう属人性を塞いでね、誰かの期待に応え続けていくってことをやっていくことで生まれる皺寄せが嫌なんですよね。そもそも一人一人に癖のような「頼まれなくてもやっちゃおうこと」があるということを前提に置いた方がよっぽど合理的って思うんです。

K .. あえて価値という言葉を使うならば、それが価値の源泉のはずなのに、蓋をして「価値を創出しよう！」と号令をかけていることの矛盾ということですよ。

M .. ほんと、それ。

K .. やや大袈裟な言葉になってしまいかもしれ

K…そこは今回、まさに考えていたところもありまして、何気ない会議室での元子さんの口癖でもある「頼まれなくてもやっちゃうこと」というものを、今回きちんと会議室の外で掲げた方が良いという確信はあったんですね。で、その外に出すという意味では、会議室の文脈から独り歩きするわけですから、それなりに想定問答のようなことを頭の中でするわけです。例えば、「頼まれなくてもやっちゃうことが犯罪行為だったらどうするんですか？」というもの。なんですけど、両手放して無条件にこれさえ言っておけばオールオックーみたいな言葉ってないので、むしろ大切なのは言葉の運用だったり解釈のほうなんですよね。

M…そうですね。

K…で、何かに似ているなと思ったら、公共空間にベンチを置くか置かないかといった論争の話で。「悪用とかイタズラとかされたらどうするんだ」「誰かが占有したらどうするんだ」「責任取れるのか」という声が上がったときに、運用面でカバー

しましよとかじゃなくて、じゃあもう辞めようとなる。何かを社会にどう委ねていくのか。人をどういう存在として見るか、見たいか。そこが問われていくんですね。

M…そうそうそう。盗まれたらどうする。イタズラされたらどうする。色々拳がるんだけど、どこにそんなモンスターがいるんですかと。みんなもちろんバラバラの個性があるんだけど、人間としてはある程度同じような存在でもあるはずですよ。全然、性善説とかじゃなくてさ、悪いことばかりの事例を挙げて何も動きがとれなくなることの極端さってやっぱりある。大体、もし仮に盗まれたとしたら、そこに解決すべき困りごとが見出されるかもしれないし、イタズラされたとしても、ああ街に遊べる場所が少なすぎるからどうにかするかみたいに次のビジョンが見えてくるかもしれない。運用とか解釈を豊かにしていくことが実際のところすごい大切なはずなんですよね。

K…そう思います。

ませんが、人の尊厳みたいなところを元子さんはウォッチし続けている感覚があります。

「共にあること」は追うと逃げる

M…共感とか共創って言うように、「共にあること」が強調されるじゃないですか。でも、それを強調すればするほど、その「共にあること」から離れていくんですね。そうじゃなくって、お互いに異物であることを喜ぼうよって。自分が異物であることにも、異物に触れることにも慣れようよって思う。予測通りになるという予定調和を面白がってばかりいることのさもしさってあると思うんですよ。それってつまり、人間の中にあるバグやエラーとか、一種の個性のようなものが悪いものになっちゃうじゃない。それってもはや、人間であることが駄目っていうことと一緒だからね。人間がバグを抱えている、この程度の存在であるということとを祝福しないで、他に何を祝福するんだらうって。だからさ、「頼まれなくてもやっちゃうよう

なことを祝う」っていうのはさ、「ありのままに生きている状態であることを祝福する」ということでもあってさ、その方が、健やかで合理的って思っちゃうわけです。

K…ああ、まさにそういうことなのかもしれないね。目的と手段みたいな話で言うと、他の誰かの目的に自分が依存するでもなく、他の誰かの目的の手段になるわけでもなく、自分自身の目的をそれぞれが全員バラバラに果たしている状態が「健やか」というもので、まさに「マイブリック」という元子さんの言葉もそうであるように、それが結果的に公益性や公共性を持つみたいな話ですかね。

M…そう思ってます。ひょっとしたら、「頼まれなくてもやっちゃうこと」がそんなに良いことばかりなのかという問いが飛んでくるかもしれないけど、人間同じ動物なんで、そう飛び抜けて嫌なことをいちいちやらないと私は思っている。



M .. 「らしさ」を投げかけることが呪いに転じる。気分も考えもほとんど変わっていくことがあるし、そういう矛盾も含めたものが自由であること、自由であることがその人の「らしさ」だと思ってるから。首尾一貫した完璧な存在じゃないでしょ、人間って。そもそも、私が建築好きになったき

M .. 「うっかり力」のような可能性って、ほとんど世の中で信じられていないような気がするんで

K .. そう。で、うっかり良い方にも悪い方にも転じてしまう。うっかり自分でも思ってもなかったような自分らしさが出てきちゃう。

M .. それも口癖かもね。

M .. ひとまず、そもそもその「らしさ」が固定されたものだという幻想があるんですよ。あの人はああいう人っていうラベル。私なんて、ただただ明るい人って思われていたりするから、私が明るく振る舞うことをやたらと期待されたりもする。そういう期待でもう呪いのようなものでさ。

かけが、「うっかり」だったから。

K .. 元子さんご自身が、うっかりで成り立っている。

M .. 18歳で家出同然で飛び出して、パチンコ屋とかでバイトして、立ち読みでうっかり建築の本を取っちゃったんですよ。建築には興味なかった、全然。グラフィックとかプロダクトデザインは好きだったんだけど、本屋さんにいくと、近い棚に並んでいたりしますよね。ふとかっこいいなと思っ手にしたのが、スペインのカンポ・パエザっていう建築家の方の本。すごいくっくと来ちゃって、バイト先も、パチンコ屋から、建築専門ギャラリーの受付とか、環境設計のアシスタントとかそういう風に変えていったんですよ。

K .. うっかりから、どんどん転じていく。



M .. 私は自由が好き、すごく。なんだけど、自由であればあるほどさ、大変なことになっちゃいませんか？みたいな話になって、自由か自由をなくすかの二択になっちゃうんですよ。そのどちらかを選ぶこと以外の選択肢ってあるはずじゃないですか。その中間に対する解像度を上げていきたいと思ってる。

K .. そこがつまり、運用や解釈の話になってくるところですよ。

M .. そう。人間って、環境によってどっちにもうっかりなってしまう恐ろしさと面白さがあると思っでいて、そういうもんなんだから、「頼まれなくてもやっちゃうこと」の個性のようなものに見慣れることができる社会の方が合理的なんじゃないかという考え方をするんです。

K .. そういう社会であることを前提としたいのに、そうならないのは、例えば、つくることや生

み出すことと、それを育てたり運営したりすることの繋がらなさというか、「しつかり運営していく」ということが話題にあまり上がらないという今の日本の社会状況にも似ていると思うんですよ。

M .. そうなんですよ。まちづくりの文脈で言うと、開発した後には運営という流れがあるとして、その開発ばっかりに注力されて、運営のところになかなか同じようにエネルギーがかけられない。自由か自由をなくすかの二択にしないためにも、みんなでしつかり運営していきましようっていう選択肢が本当はあるんですよ。

うっかりの大切さ

K .. そう思います。あと、元子さんが今ほどさうらと言われた「うっかり転じる」というフレーズも口癖として、もう10年15年前からリフレインされていると思うんですよ。

かヘイトとかもさ、慣れてないから弾きたくなるっていう。人間って、生まれたときから意地悪な人はいないと思うんですよ、でも、恐怖とか警戒心から偏見が仕上がっていくでしょう。あの体験が、私にとつての教育だった。学校がそういう課題を与えてくれたっていうのもあるけど、どこでもいつでも、もう生きてる間の全部が教育じゃんって。だから、私はせめて街の1階で、うっかりいろんな人を見かけることが当たり前になっていくといいなと思ってる。それってさ、多様性を学びましょうっていうことを目的にして、わざわざ私が出会った方のところに向いてみんなで学びましょうっていうこととは全然違うじゃないですか。

偶発性教育

K.. そうなんですよ。哲学者の鶴見俊輔が「子どもと大人の関係というのは、もっともうまくいった場合、理想として、その偶発性教育であること」って言っていて、まさにそうだな、と。

すよね。「自分らしさ」っていう呪いのようなもので、可能性が閉じちゃっている。学歴がないからできない。馬鹿には分からない。そういうことを、当の本人が思わされちゃったりする。自分の興味や関心が、うっかり自由に動くことを許している社会の方が良いですよ。

K.. 「うっかり力」って、良いですね。そのうっかりの舞台が、街であって欲しい、街のグランドレベルの営みであって欲しいという。

M.. そういうことなんです。

K.. やっぱ、今はいかにうっかりさせないか、ということの力学が強いような気がします。寄り道は許されない感じ。寄り道や道草は確かに危ないこともあるかもしれない、でも、危ないから寄り道はしないことにしましょうっていう方向性じゃなくて、寄り道がしやすい街や社会にしましょうっていう方がやっぱ豊かですよ。

学びの舞台はどこにあるのか

M.. そうそうそう。私さ、家庭も学校も全然居心地良くなかったし、どこで学んだかというところ、もう全部としか言いがたいんですよ。

K.. 全部。

M.. そう。小学校低学年のときに、社会科のレポートでね、街で働いてる大人にインタビューして、レポート作ってきなさいっていうのがあったんですけど、私さ、周りが田んぼばかりでさ、それで見かけた知らないおじさんに勇気出して声をかけたんですね。そしたら「うー」って言われて、驚いて怖くなって逃げたの。それで、後から聞いたら、その方は耳も聞こえないし口もきけない人だった。

K.. ああ。

M.. それでさ、やっぱ見慣れていないと怖いって感じちゃうんだなって思った。要するに差別と

M.. ほんと、そう。

K.. つまりその「偶発性教育」のようなものがたくさん起こる街や社会であって欲しいということじゃないですか。学ぶ側が学ばされているという意識を持たないで済む。教えている側が教えているという意識を持たないで済む。で、これって、「気遣い」と同じような話で、気遣いに上級というものがあるならば、それは、多分相手が気遣われていることに気が付かない。なんなら、気遣いしている方も、気遣いをしていることを忘れてる。

M.. 笑。

K.. そうなってくると、もはや「気遣い」がほとんど魔法使いのようにも思えてきます。

M.. 笑。

K.. いや、で、元子さんの仕事にはそういうと

ころがあり、その仕事が多々人の色々な行動を後押しするための補助線になってるんだけど、その線がひかれていることを意識させない。

M .. それは、そうね。

K .. 様々な状況にうまくこと埋め込まれているので、それは感謝されづらい。ビジネスケースに乗りづらい。

M .. 笑。でも、そこが本当に大切なところなんですよ。

隷属してない、させてない。それを祝う

K .. その次元の仕事ってあるんだと思うんですよ。その上でなんですが、人の能動性が発露される瞬間ってというのが、ある種すごく美しいものというか、喜べるものとして、やっぱり元子さんの中で強くある。

目的が外部に依存しているということ

K .. 冒頭に、目的を見失わないようにという話が挙がりましたが、目的という言葉を使うならば、自分自身の目的を外部に依存し過ぎるのもマズいよね、ということになってくるなと。その依存関係は容易にヒエラルキーを生んでしまう。

M .. そうそう。SDGsもそうなんですけど、わかりやすい目的が掲げられると、それに依存してしまいがち。

K .. 鬼の首をとったかのように、水戸黄門の印籠みたいに、これさえ掲げれば許されるみたいに使われるのはやっぱり違うよな、と。

M .. やっぱりさ、自分で悩みながら出てきた目的みたいなものって、個人の責任にちゃんと紐づいているじゃないですか。そこに逡巡がちゃんとある。でも、そうじゃない場合は、自分の言葉じゃない

M .. どなたも、私も、誰の支配下でもないというところ。誰の奴隷でもない状態っていうのを祝福してるわけですよ。

K .. 自由であることを。

M .. そうそう。たとえば人間は、重力の奴隷かもしれないし、酸素の奴隷かもしれないけど、でも、自分の感覚とか、うっかり受け止めているいろんな影響を受けて仕上がってしまったものがありつつ、もう誰の強制力も働いてない状態は自由だから、お互いに自由でいられるということは、私にとっては祝福の対象なんです。

K .. 非常に腹に落ちるものがあります。人間関係において主従関係だったり隷属関係のようなものだったりを徹底的になくしていこうよ、という。

M .. そういうことなんです。

からこそ、ある意味無責任になれるから、強くなる。

K .. ああ、自分の正体を晒さなくて済むから、強くなれる。

M .. そうそうそう。

存在を祝う

K .. 「祝う」ということが、そもそもどのようなことかっていう話になって来るかもしれないませんが、以前、「喜び合う」というフレーズに重みを感じる形でお話されていたのも印象的でした。

M .. あー、はい。そうですね。祝福って、本当に心から喜べることだと思うから、自由であることをお互いに祝福できたら良いじゃないですか。なのに、結構みんながみんな喜び下手なんだと思います。例えば、完全に美しくないと喜べない、



K.. 「頼まれなくてもやっちゃうことを祝う」って、それこそ頼まれていないわけではないんですけど、応援メッセージのような響きもあるなって思っているんですね。

M.. だってさ、「頼まれなくてもやっちゃうこと」だけがクリエイティブって言っても良いですからね。

K.. うわ。言われてみると、ほんとそうなんですよね。人知れず、そこに向き合っている方々、特に若い方々にこの冊子を読んでもらいたい気持ちもあります。

M.. いやなんかさ、私が若いときと言うとさもう何十年も前なんだけど、就職しなきゃ死ぬんじゃないか、進学しないと死ぬんじゃないかって、たくさん言われてきたけど、大人になってみると、良いか悪いかは別としても死なないということはわかった。脅されていたんじゃないかと振り返って思います。



完全に正しくうまくいかないと喜べないとか。でもさ、他人様はやっぱ自分の脳みそを超えた存在じゃないですか。

K.. はい。

M.. せっかく生きてたら、やっぱり、そこに気が付いたり喜べたりする方が楽しいでしょう。

K.. そう思います。

M.. そこに気が付いていたら、もつとそれを味わって喜び合えるはずなんですよね。

K.. ああ。例えば、赤ちゃんって、うんちをしたら、「うんち出たねー！」って喜ばれますよね。

M.. 本当にそれ。赤ちゃんが泣いているとき、うるさいってなっちゃう人いるけど、赤ちゃんもさ自分自身の身体能力を確認しているかもしれないじゃない。自分の体からこんな声が出るんだ、こ

んなに空気を震わせることができるんだって、手探りしながら自分でも驚いているかもしれない。こちら側からは想像もできないくらいに試行錯誤や工夫があるのかもしれない。私は、そういうことが好きなんだろうと思うんですけどね。大人だって、そういうふうにして、世界を味わっているはずですし、そうありたいですよ。

K.. ああ、生きていることそのものを祝うというか、よくこの世に存在しているね！ってお互いに祝う感じがありますね。フリーコーヒーという形で、街なかで屋台をひいてコーヒーを振る舞っているのは、道ゆく人にそれをしているところがある。

M.. あるある。よくこの東京砂漠でサバイブしてるね！って。

「頼まれなくてもやっちゃうこと」こそがクリエイティブ

K.. 社会はそんな甘くないぞとかってすごい言われますよね。

M.. そうそうそう。お前のために言うんだ。社会はそんなに甘くないぞ。もし、そういうフレーズがあったとする。これね、ほんとと、そのように思い込ませて支配したいんだって言うってると同じだと思うんです。それが、自分もそういう風に自由に生きていきたかったという気持ちか燃っているのかもしれない。

K.. ああ。

M.. 正しいかどうかって問われるとモヤモヤしてくるのはそりゃそうだと思うんだけど、「頼まれなくてもやっちゃうこと」って、基本的にはモヤモヤしないで済むものでしょう。あなたは本当にそう思うの？と問われても、もうそういうもんだとしか言えない強さがそこにあるじゃない。

K.. 本人にとっての、ときに切実さが伴う必然

性があるんですよね。

M .. なんかさ、直感とか想像とかって、すごく主観的でさ、馬鹿にされがただけとさ。でも、その人が生きてきたさ、経験値の集積であってさ、論理的に言語化できるものっていうのは、その集積のうちのわずかじゃないですか。社会的な正しさと言ったときに誰かにとっての都合の良い正しさを押し付けられてるんじゃないかなって警戒心が常にある。

K .. 今じゃ、フリーコーヒーみたいのって当たり前になりつつありますけど、元子さんはそれこそ「誰からも頼まれていない」のにコーヒーを街なかで振る舞いまくった結果、そこから新しい関係性が生まれたりとか、活動が生まれていくっていう。

M .. いや、本当にコロナでさあ、不要不急の外出はってワード聞いたときに、私って不要不急の塊だったんだって本当に思った。フリーコーヒーも、人様が社会がどうかっていうことよりも、そうい

思える話ばかり。贅沢ですよ。素晴らしいんだけど、本当に。

K .. 他の人が大切にしているものを、それに共感とか理解が及ぶかどうかの前に、まずは大切に合えるという受け取り方がしっかりできているということですよね。

M .. それが、冒頭でお話した「健やかに生きる」という状態なんですよね。

K .. ああ。

M .. それがちゃんとできていたら、そうそう変なことって起きないはずなんですよね。

K .. そんな気がしてきました。

M .. もうさ、おそらく一生喋りもしなかった人と時間と場所をともにしてさ、その方が思わずのびのび話しているさまを見ることができると。本当

うことをしてみたら誰がどんな顔するだろうっていう、まだ開いてない扉を見つけたから、それを開けてみないと気が済まなくなっちゃったんですよ。

K .. 好奇心に近いんですかね。

M .. コーヒーを振る舞っているとき、一見お金の縁がなさそうな人が幸せそうだったりとか、裕福そうな人がしんどそうだったりとか、色々ある。まさに「頼まれなくてもやっちゃおうこと」でいうと、コーヒーをもらってくれる人が色々とお話をしてくれることが本当に面白かった。こちらから問わなくても、そういう話が始まる。本当に面白いなあっていう一方で、この話はこの方が何十年と生きている中で、1回も人に聞かれなかった話だろうと思うときもあった。

K .. ああ。

M .. それがきつとこの人の宝物なんだろうなって

に贅沢なものなんですよ。「頼まれなくてもやっちゃおう」っていうのは、その人が内側ですごく正直だったこと。そのさ、底からの正直な部分が好きなのかもね。なので、「頼まれなくてもやっちゃおうことを祝う」ということは、その正直さを祝おうって話ですよね。

本書のタイトルは「1階革命」ですが、本当に起きつつある革命は、人間自身の変化だと思っています。わたしは、どうありがたい生き物なのか、そうなるためにどんな「今」を選択しながら存在しているのか。私たちは、生きるということへの根源的で個人的な問いに対して、これまででない向き合い方をしているのだと思います。1階とは、メタファーとしても捉えられます。世界の1階、社会の1階、現在の1階、あなたとわたしの地平である1階とは、どうなっていることが、よりよいのでしょうか。よいつてどういうことでしょうか。よりよいほうへと歩み始めるための革命のきっかけこそ、壁の内側や画面の中ではなく、まちなあれば、1階にあれば。見ようと意識していなくても、ある日ふと目に入ったり、偶然手に触れたり、不本意にも出会ってしまうようなところに。（田中元子「1階革命」より）





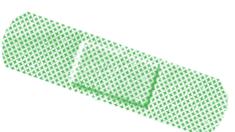




発注を考える

未来の奴隷にならないために

若林恵



若林恵さんが編集長をされていた「WIRED」を毎号、心待ちにしていました。様々な事象に対して、そのそもそものを問う内容に、素直すぎる言い方でもありますが、ワクワクしながらも鼓舞されるものを感じていました。そのなかで、特集テーマが「発注」として予告された時の衝撃は今でもありありと覚えています。同時に、若林さんが「WIRED」を離れ、その予告が予告で終わってしまったことに覚えた強い落胆もいまだに拭えない切れないものがあります。その後、若林さんが設立された黒鳥社のミッションにある『想像』は『創造』に先立つ」という言葉を借りるならば、発注は、仕事や社会に先立つということです。であれば、より良い社会や仕事を望むなら、そこに先立つものを見直さないといけないように思います。

いざ取材に伺ってみると、「発注」をテーマとしたプロジェクトの立ち上げ準備資料が、若林さんの手元のコンピュータに。さらには、そのタイピングしたての資料をオープンかつ網羅的に紹介してくれます。その全貌をここでご紹介するには、私の力量もページ数も足りていませんが、近いうちに公開されるそのプロジェクトの予告編としても是非ご一読ください。

黒鳥社

雑誌、ウェブ、映像、イベント、旅などメディアを問わず、コンテンツをプロダクション（制作）している、若林さんによる「コンテンツ・レーベル」。「よりよい『想像』のないところに、よりよい『創造』はありません」とし、「いまの当たり前を疑い、あらゆる物事について、『別のありようを再想像（*Re-Imagine*）する』」というミッションが感じられます。

若林恵・畑中章宏『忘れられた日本人』をひらく —宮本常一と「世間」のデモクラシー— 黒鳥社

「民主主義の日本的起源」を探すと銘打たれたこの書籍で、一つのモチーフになってくるのが、宮本常一が描写している「村の寄り合い」というものです。投票や採決ではなく、「だから」と続く終わりのない話し合いのなかで、それぞれの体験や知識が持ち寄られて、合意形成が成さ

れていく。書籍中のフレーズをお借りすると「これからも一緒に生きていかなければならないという前提に立った上で物事が決定されてなくてはならない」ということであり、それは今回の取材のなかで語られる「信頼」ということと通底してくるような気がします。

宇野重規・若林恵（聞き手） 『実験の民主主義—トクヴィルの思想からデジタル、ファンダムへ—』中央新書

若林さんはありとあらゆるコンテンツを制作されていますが、ここでは最近の民主主義を巡る書籍をご紹介します。刺激的な内容そのものに関しては、是非書籍にあたってくださいと思いますが、前述の「村の寄り合い」を地で行くような「対話を一つの実験として遂行する」という書籍のスタイルに、目的と手段の折り重なりというか融合を感じてアツくなります。

若林恵『さようなら未来—

エディターズ・クロニクル 2010-2017』

岩波書店

今回の取材でも若林さんから「未来の奴隷になるな」というようなフレーズが出てきます。「さようなら未来」とはつまりそういうことです。



なぜ「発注」か？

K…「水刺身を食べる会」、楽しかったです。黒鳥社のYouTubeチャンネルで配信されている「blkswn jukebox」のなかで韓国映画『楽園の夜』で重要な役割を果たす水刺身(ムルフェ)の話題が、相方の小熊俊哉さんと盛り上がりあって、じゃあ視聴者と食べようという流れもいい感じでした。

W…思ってたよりも楽しい会になってよかったです。

K…参加者された方もみんな素敵で、飲み食いしながら、若林さんが『WIRED』時代に特集しようとしていた「発注」の話で盛り上がりました。今回制作している冊子のテーマが「頼まれなくなつてやっちゃうことを祝う」というもので、その生みの親と言うか、もともとのきっかけとなっていたのが、田中元子さんと、そして若林さんだったんです。今日はその幻の「発注」特集で何をやろうとされていたのかというところを伺いたくてインタビューにきました。水刺身の会でも、

K…熊井晃史

W…若林恵

発注の難しさについてみなさん思うところもあったようで、大盛り上がりでしたよね。

W…もう5年以上も前のことなので、そもそもなぜ発注の特集をやろうと思ったのかは正直あまり覚えてないんですよ。おそらくですが、「新しい会社」という特集をやった流れが強く作用していたのだと思いますが、その特集のなかで、DJ機器メーカーのVestaxの創業者の椎野秀聰さんをインタビューしたのが大きかったのかもしれないですね。

K…それ、どういうお話ですか？

W…椎野さんは、インタビューのなかで生産工場の話がされていて、生産工場の現状の技術力に収まる発注ばかりしていると技術力は落ちて行くばかりなので、現状の能力よりちょっと超えるような発注をしないとダメなんだと仰つて、感心しちゃったんです。

K…発注を通じて工場を育てるということですよ。

W…そうなんです。そう考えると、今のわたしたちたちの発注って、ただ金銭で能力を買ってやるだけじゃないですか。発注というものをただの等価交換としてしか捉えていないところに、すでにして日本の経済文化の貧しさがあるのではないか、ということですね。

K…発注の非対称性なんて話を、水刺身の会ではされてきました。

W…発注の変なところは、発注する側が、発注している事柄については、多くの場合シロウトだということです。建築の例が一番わかりやすいですが、素材、工法、関連する法規なのについて建築家よりも理解している施主なんて、ほとんどないわけですよ。発注という行為には、そもそも情報の非対称性があって、ほとんどの場合、発注する側にお金を払う側の方が情報を持っていない。

こうした基本的な構造を理解していないから、金で被発注者の頬を引く叩くような発注ばかりが罷り通るのではないですか。

K…そう言われるとハッとしますよね。

K…日々業務の中でやっていることなのに、ほとんど語られませんか。そもそも学問としてここに収まるべき話なのかもよくわかりませんが、マニユアルのようなものも探せばあるのかもしれないが、一般化されているとは言えないと思います。専門家もいないと思うんですよ。

K…「発注学」みたいなものはないと。

W…そうなんです。なので、特集をやろうと思っただけなんです。先行する議論の蓄積もないので、どうアプローチしていいものか当ても悩んでいたんです。そしたら編集長職をクビになってしまったので、やらずに済んで、ある意味ほっとはしたんです。で、ずっとそのまま放置していたんで

「昨年からKOKUYOさんの「WORKSIGHT」というメディアの制作をお手伝いしていますが、これなんかは完全にそういうやり方ですね。あまり深い考えをもたないまま特集案を立てて、やっていく中で考えていく。出来上がって、はじめて「ああ、こういう特集だったんだな」ってことを理解するという感じです。

K…発注で雑誌をやるとなると、どういうことになるんですかね？

W…おそらく企画は無限に立てられると思うんです。というのも、発注は、どんな業界のどんな業種にも関わるものですので、業界切りや業種切りもできると思いますし、発注に関する情報に期待があるとすれば、間違いなくマニュアル的な価値への期待が一番大きいと思うので、そういう観点からもやれることはあります。さらに先ほどちょっと語ったように、そもそも「発注って何？」という話もあって、これには当然、経済学や経営学的な視点もあるでしょうし、情報の交換や、コミュニ

すが、実は去年になって複数人から「発注の本つくってくださいよ」と言われたんです。

K…わたしもそのひとりでした。

W…なかでもとりわけしつこく言ってきたのがtofubeatsさんで、会うたびに「発注、やりましょうよ」と言うんですね。言いたいことがいっぱいあるということだと思っただけですが、そういった声に押されてチラチラ知り合いなんかにも発注の話をする時、「仕事は発注がすべてでしょ！」って感じで食いついてくる人なんかもいて、ちょっと真面目に考えてみようかという気になってきたということなんです。とはいえ、相変わらず、どう整理して行けばいいのか、わからない話ではあるんですね。

恨み骨髄！ブルシット発注！

K…本にするイメージなんですか？

W…本を作るとなると、それなりに一貫性をもったパッケージにしないといけないわけです。始まりと終わりを作らないといけない。ところが、発注の話は、どこから話した方がいいのかわからないですし、どこに終わりを設定するのもかわかりませんから、1冊でどうこうできる感じでもないなとは薄々は感じていたんです。よほど考えがまとまっていなくて、1冊にまとめるのは難しい。なので、取材やワークショップみたいなものを、試験的に進めて行きながら、発注とは何かを考えていくような建て付けにならやれるかな、と漠然と考えているところです。

K…雑誌にしちゃうとか？

W…雑誌のいいところは、やっぱり適当でいいところなんです。雑誌づくりというのは、ひよんな思いつきを無理矢理広げていって、それをやりながら根拠をみつけていくというプロセスなので、新しい物事を理解していくプロセスとして、雑誌づくりというのは実はかなり有効な手法なんです。

ケージョンの問題として扱うこともできそうです。あるいは、柄谷行人さんの「交換様式」を援用しながら捉えて行けば文明論もできるかもしれないし、岩井克人さんの会社論を中心に整理して見るようなことだってできるかもしれません。

K…壮大ですね。

W…おそらく誰も真正面からやらないテーマだと思うので、多少雑でも怒られないかなとは思っているのですが、まあ、いずれにせよ、やっぱり面白いのは、「発注があるある」みたいなことだと思っただけで、それはいろんな人に聞いてみたいですね。「恨み骨髄のクソ発注」とか(笑)。

K…ブルシット発注ですね。

W…「一生許さない」というような発注ですね。そこまでなくても、色んな人が「おいおい」って怒ったりドン引きしたような発注には少なからず出会っているのではないかと思います。



K .. ああ、たしかに。「おれは目利きなんだ」って感じてくる発注者は、たしかにウザいかもです。

W .. かつ、先の Vestar の椎野さんの話の背後には、発注者の責任、あるいは発注者の倫理、といったものも控えていそうですから、「発注能力」という言葉の背後には、かなり複雑なパラメータが潜んでいるのだと思います。大きな企業が、個人や零細企業に何かを発注する際には、すでにして権力の勾配があるわけですし、そうしたことをある意味トータルに考慮しないと、おそらくいい発注というものは生まれませんじゃないでしょうか。

K .. 「権力」をめぐるダイナミズムをちゃんと読み解けないと「クソ発注」が発生するわけですね。なるほど、発注、やっぱり深いですね。

W .. 深いかどうかはおいても、語るべきことがいっぱいあるのは間違いないです。権力という話でいえば、「発注における心理的安全性」なんていう



K .. 聞きたいですねえ。

W .. あるいは、その逆パターンで、「この発注は嬉しかった」といったものもあると思うんです。そういうものについては、被発注者だけでなく、発注した本人にも話を聞いてみたいですね。

K .. 一生恨む発注。一生感謝する発注。

W .. さらに別の視点から、外国と日本の発注の違いなんだろうところも気になります。昔、海外の自動車メーカー日本支社のコミュニケーションのトップと話していたら、「なんで日本人はすぐ代理店に発注するんだ？」って首を傾げていたことがあって。その人は本国にいたときには、CMのディレクターや制作スタジオを自分で探して、自分で直接交渉して、仕事を依頼していたというんですね。

K .. その方が絶対仕事は楽しいですよ。でも、

それをやらなくなっていくことで、発注する側が、まともに発注ができなくなっていくますね。発注者が発注書を書けない、発注にまつわる要件定義もできない、といった話はよく聞きます。

W .. 発注能力の欠如。これは大問題ですよ。なんですけど、そもそも「発注能力」って何なのかというのを誰も論じないので、とりあえずこれまでのやり方でいいや、となってしまうんでしょうね。

K .. 発注能力がないっていうのは、目利き力がなっていう話になってくるんですか。

W .. どうでしょうね。もし仮にそうだとするならば、じゃあその「目利き力」って一体何なんだ、ともなりますよね。ここはさっき話に出た、発注者と被発注者の情報の非対称性と関わってくる話でして、「発注者の方が情報を持っていない」という制限の中で発動される「目利き力」とは何かということを考えて、単に何かに詳しくなければいいという話ではなくなるわけですね。

のも面白いテーマだと思えますし、それは最終的には「信頼」のような話につながっていくような気がします。

K .. どういうことでしょうか。

W .. 権力勾配があるところでの発注は、結局は付度に行き着きますよね。予算規模の大きい案件で、相手が大きな会社で、例えばクリエイティブの仕事が発注されたら、いくら「自由にやってくれ」と言われても、誰も自由にはやらないですよ。 「相手が喜ぶ感じ」の「自由な雰囲気のもの」を先回りして探り当てるみたいなことになりますよね。つまり、発注者／被発注者のそもそのパワーバランスの中に、語られない「要件」が含まれているということになるわけですが、被発注者は日々そのことを気にしながら仕事をしている一方、発注側はそのことにまったく気づいていないことが、まあありそうです。そこにさらに別の勾配があったりもするわけですよ。

ためには「一回その建物を建てるしかない」ということ
 うこと
 なのですが、これは何を言っているかと言います
 と、仕事というものは、常に一回性の中にあると
 いうことなのではないかと思えます。

K..再現性というものが、実はないということ
 ですね。であればこそ、見積もりも、要件定義も、
 原理的には不可能だと。そういえば、『WIRED』
 日本版編集長を退任されたときに発表された「い
 つも未来に驚かされていた」という文章の中で
 も、「あらゆる仕事って実は一回しかないものよ
 うな感じがする」おっしゃってましたよね。

W..そうかもしれないですね。そんなことを書いた
 のも、そもそも発注のことが頭にあったからだと思
 うのですが、そうやって発注を考えていくとわか
 かってくるのは、わたしたちの社会が、仕事とい
 うものをいかに「再現可能性」において捉えてい
 るのかということ。見積もりも、その仕事を
 「一回性」において捉えるのか、それとも「再現

K..面白いですね。これはジェンダーや多様性を
 めぐる議論なんかに繋がつてきますね。

W..とはいえ、そもそもが対等な関係性ではな
 いからこそ、発注の必要性が生じているわけです
 から、お互い対等にやりましょう、といったところ
 で何の解決にもなりません。

K..自社ではできないことがあるから、その道
 にプロに発注しているわけですからね。色んな非
 対称が関わっているわけですね。

W..まさにその通りで、実際、経済規模も、持つ
 ている情報や技術力も、使っている言語も、行動
 様式も、職業倫理も異なっているような相手が
 必要になるのが、発注という行為のそもそもの
 基盤であるわけですから、そこをまずはよく考
 えないとすよね。それを踏まえた上で「対等
 であることはいかに可能か」を考えていくと、お
 そらく「信頼」とは何かという話になっていくよ
 うな気がします。

K..なるほど。面白いです。仕事とは何か、
 という問いそのもののように感じます。

見積もりと再現可能性

W..あるいは、もうちょっと具体的に「見積もり」
 なんていう話も面白いんです。

K..ほお。

W..以前、実は一回だけ発注に関するイベント
 をやったことがあって、そこに建築家をお迎えし
 て話を聞いたのですが、その方がおっしゃるには
 「100%正確な見積もり」は存在しないとい
 うんですね。

K..ほお。

W..つまり「100%正確な見積もり」をつくる

可能性」において捉えるのかで、実は、その意味
 やメッセージが大きく変わってくることになるはず
 ですが、コンプライアンスの観点から、見積もりの
 ようなものが、ガチガチに規制されていってしまう
 と、本来「一回性」の中にあるものが、「再現可
 能性」の中に押し込められてしまっ、無理が生
 じてくることになるのだと感じます。

K..仕事というものを根幹で支えているパラダイ
 ムを180度転換しないと、その隘路から抜け出せ
 なくなりそうですね。

W..加えて、見積もりというものの中には、「時
 間」の概念が含まれていたりもしますよね。同じ
 ような仕事であっても、その時の時間的条件下によ
 って価格は変わってくるでしょうし、そこに取引相
 手との継続した関係性が関与してくると、前回、
 今回、次回の見積もりが弾力性をもって変動する
 こともありますよね。

K..「今回は負けとくか」みたいなことですよ。

ろに、さまざまな困難があるのだろうと考えているということなのだと思います。そして、発注というものを考えることで、もしかしたら、そのズレを明確化できるのかもしれないと思っているのかもしれません。

K ..面白いです。

未来の奴隷にならないために

K ..発注を考えることは「世直し」なんだなっ
て感じがしてきました。

W ..それは自分もそう思うところはあります
(笑)。世直しですよ。

K ..日本において、発注不全に由来する現象が
めっちゃめちゃたくさん起こっていて、その具体的
な現れとしては、他人を奴隷化したりだとか、
仕事というものの全体性を担保しなければいけな

W ..関係性が継続することを一切考慮しなけれ
ば、仕事は常にワンショットの仕事になり、「定価」
に基づいて製品やサービスや労働を販売すること
になります。その「定価」というものは、基
本やはり再現可能性⇨大量生産に根をもつ概念
だと思っんですね。そしてそれはあらゆる仕事
を、工業製品の調達と同じ位相で考えるというこ
とへとつながっているような気がします。

K ..ああ、そうですね。派遣労働の基底にある
考え方は、まさに「調達」ですね。とはいえ「発
注」と「調達」はどう違うのか、と言われると、
どこが違うのか判然としませんね。

W ..そこは実は自分もよくわかっていないところ
ですが、そこが実は、「人間はロボット/AIに
仕事を奪われるのか？」という議論をめぐるひと
つの大きな分岐点なのではないかと感じます。

K ..面白いですね。Chat GPTにプロンプトを書

くのと、発注は違うのか、同じなのか。

W ..ここは、掘った方がいい話かもしれませんね。

K ..この辺りの話は、とはいえ、「いつも未来に
驚かされていたい」の中でも語られていましたよね。
「近代の産業社会は、その理想形として最初から
「超人⇨ポスト・ヒューマンを仮想してきた」「工
場ってのは最初っからロボットに最適化されたシス
テムで、そうなんだけど当初はそんなロボットな
んでないから、ヒトをそれに近いものとしてつく
りあげるために近代教育が生み出され、修理工
場として近代病院ってものが整備されていったとい
う」。この考え方は、宇野重規先生との著書『実
験の民主主義』のなかでも、官僚制度とDXを
めぐる議論で敷衍されていましたよね。

W ..ずっと同じ話をしてるということですよ
(笑)。いずれにせよ、「仕事」というものをめぐ
るこれまでのパラダイムと、「仕事」をめぐる現実
とがズレてしまい、それがうまく合致しないとこ

いのにそこが見過ごされていたり、さらにはそも
そも楽しくないといったことが累々とあると。で、
それをどうにかするぞという。

W ..どうにかできるかわかりませんが、発注につ
いては、言語化も意識化もされていない領域がた
くさんあると思うので、それを言語化していくこ
とだけでも意味はあるのかな、と。

K ..より良い発注というものが、世の中に必要
だなと改めて感じるのですが、発注を「誰かに何
かをお願いごとする」ってことで考えると、全員
がおしなべて発注者でもあり受注者でもあるはず
ですよ。生きることそのものって感じもしてき
ます。

W ..そうですね。その観点から見れば、発注を
一種の相互依存関係として捉えることもできると
思いますし、そうした相互依存性の中においてピ
ジネスというものを捉え直す、もしかしたら「ケ
ア」という概念につながっていくような道筋も見

ます。これを読むと、わたしたち自身が、すでにして移民労働者にほかならないのだと思えてきます。

K .. きついですね。身につまされます。

W .. でもまあ、資本主義っていうものが、そもそもそういうものなのかもしれませんので、もうしょうがないなと諦めたい気持ちもあるのですが、自分ひとりで戦っても絶対壊れないような「資本主義」を真正面から相手にするのでなく、別の観点から未来というものを捉え直してみたり、現在という時間を取り戻せないかと考えてみたりすること、自分の中にある「資本主義」や「近代社会」をめぐるパラダイムをずらしたりすることができないか、というのがおそらく発注に興味をもっている理由なのだと思います。

K .. 「頼まれなくなっちゃうことを祝う」という今回の冊子のテーマの核心は、そう考えると、「現在を自分に取り戻すこと」なのかもしれ

K .. 自分が何によって成り立ってるか分からないから、自分が何をされていて、何ができて、何ができないのかも分からなくなってしまう。そうであればこそ、ますます「再現性」が重宝されるということになっているのかもしれませんが。「これから *VUCA* (*Volatility* / 変動性・*Uncertainty* / 不確実性・*Complexity* / 複雑性・*Ambiguity* / 曖昧性) の時代だって散々言われているにも関わらず、再現性の中にとんとん自分たちを押し込んでいってしまっているのは大きな矛盾ですね。

W .. 今年の5月にわたしがやっている黒鳥社と

いう出版社から刊行する予定の本がありまして、ジョン・パージャーという英国人作家が1974年に書いた『第七の男』という本の日本語版なのですが、当時のヨーロッパの移民の問題を扱っています。そのなかに、資本主義社会における移民労働者の心の中で、過去・現在・未来が、どう感知されているかを分析したシークエンスがあるので、パージャーは、移民労働者には「現在」というものがないというんですね。つらい労働を自分の中で正当化するために、過酷な「現在」は、約束された未来のためがあると自分に言い聞かせ、現在の全てを未来に投資してしまう。結果、現在がただただ空虚化していくというわけです。

K .. いつか幸せになるんだってずっと思い続けて、そのいつかは永遠にこない。いつかなにかやろうと思っただけでも、そのいつかも永遠にこない。「未来の奴隷」になってしまうわけですね。

W .. 50年前に書かれた本ですが、他人事ではないと言いますか、ますますリアリティが増してい

ません。

W .. 仕事というものが、自分の「人生の時間」と切れちゃっているんですね。そんな所で経済なんか発展するわけじゃないですね。

よくよく考えたら、どんな仕事も、もしかしたら一回限りなんじゃないかって気がしてきて。その一回性のなかにとれだけ深く身を沈められるかが、ヒトってものにとってもものすごく大事なことなんじゃないかと。
(若林恵「さよなら未来」より)

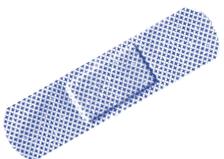








ボランティアの文化人類学
猪瀬浩平



頼まれなくなつてやっちゃうことを祝う。それってつまるどころ、ボランティア精神を尊ぶということと一体
ななが一緒で違うのか。自発的で無償。かといって、他者の存在を必要としない自発というものは無い気がす
るし、それが無償であり続けることへの疑問はあるし、公共性と言っても自分を減して臨むものでもないよう
な気もする。鬼の首を取ったかのように自発性や能動性を根拠に置きすぎると全てが自己責任論に終着してい
きそうで怖さも覚える。数十年前までは見慣れなかったボランティアという言葉。いまや、至極あたりまえに
なったような気もしつつ、その奥底にある意味や意義を改めて問うために、文化人類学や民俗学を専門としつ
つも、自身もボランティアをし、そして大学で「ボランティア学」を教え、「ボランティアってなんだっけ？」
を著した猪瀬浩平さんを訪ねました。

見沼田んぼ福祉農園
さいたま市の見沼田んぼという地域にある、「障害のある・なし関係なしに農業しながら、地域のなかに様々なつながりをつくること」が目指されている農園。猪瀬さんは、そこでボランティアをし続け、そこを地元として生きる一人の人間として、様々な状況に巻き込まれ、そして、巻き込んでもいきます。

猪瀬浩平「分解者たち — 見沼田んぼのほりを生きる」
(生活書院)

見沼田んぼを、そこに身を置き生きる猪瀬さんが書く。それが巡って、「私や私の周囲のいずれも名もなき人びとが、雑多な生きものや事物がただ目の前にある世界を生きていくこと、ばらばらでありながら、ときに交わる、そして離れていく有り様を凝視し、埋もれた痕跡を掘り起こしていく」ことになる書籍。

猪瀬浩平「ボランティアってなんだっけ？」(岩波ブックレット)

ボランティアとは何か。それ

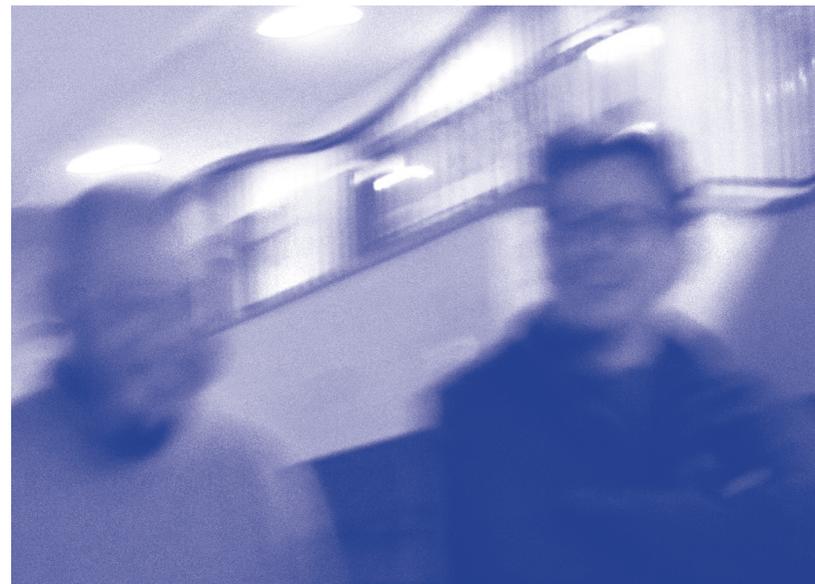
を「非真面目」に考えるというこの書籍では、最終的には「自治」をボランティアと読ませることで筆が置かれています。それはどうか。それは猪瀬さんの実体験を交えながら語られる文体に触れていくと感得していくのですが、もっと言うと、人は本来ずっとそういう生き方をしていたのでは?と思えてきます。

猪瀬浩平「野生のしっそう — 障害、兄、そして人類学とともに」(ミシマ社)

今、スゴイ本を読んでいるという体感が迫ってくる。随所に心にひっかかる言葉がありそれに気を留めながらも、ぐいぐいと読む。とはいえ、じゃあ、これはこういう内容の本ですと要約することが憚られる。というか、できない。そう簡単に分かった気にならないということが、かけがえのない尊厳のある存在への眼差しのようなでもあります。「失踪と疾走のあわい」。それが、読むという体験をも貫いていきます。

猪瀬浩平「むらと原発」
(農文協)

「窪川町における原発立地をめぐる住民投票条例の制定は、これまで原発反対運動によってもたらされた画期的な条例と評価されてきた」のだが、猪瀬さんは「その住民投票が行われなかったことこそが重要である」とします。なぜか。例えば、それは人々が会話をし続けるためともいえるのですが、それはまさに、若林さんが手がけられた『『忘れられた日本人』をひらく』で描写されている、「村の寄り合い」の様子そのものであるようにも思います。



K…熊井晃史

K…「頼まれなくなったってやっちゃうことを祝う」というテーマを掲げたわけなんですけど、その「頼まれなくなったってやっちゃうこと」って、よくよく考えたらボランティアってことなのかもしれない、いや違うかもしれないという逡巡が芽生えたんですね。それで、猪瀬さんの「ボランティアってなんだっけ？」を呼んでみると、ボランティアが最終的には自治に置き換えられている。巷で言われているボランティアのイメージとはかなり違うものとして語られていて、とてもびっくりしつつ、非常に腑に落ちるところもありました。なので、今日はお話を伺いながら、このテーマを深掘りしていきたいと考えています。

I…猪瀬浩平

I…ありがとうございます。そういうえば、熊井さんが事前に送ってくれた資料に書いてくれましたけど、若林恵さんと畑中章宏さんの『忘れられた日本人』をひらく」をわたしも読んでいて、「むらと原発」で書いたことと重なっているなと思っ

ていました。

K…そうですね。『忘れられた日本人』をひらく」では、民俗学者の宮本常一が描写していた村の寄り合いが着目されていて、長時間の話し合いという、まさに寄り合いの中で会話が引き延ばされていくことの意味が語られています。一方で、「むらと原発」では、住民投票条例を制定しながらも、投票で決をとって終わらせるというものではない方法、つまりその条例に基づいた住民投票を実行せずにいた村のあり方が浮かび上がっていく。そのどちらから、多数決以外の民主主義のあり方が、ありありと感じ取れるものでした。

I…文化人類学者のデヴィッド・グレーバーがいう「民主主義の非西洋起源」という話とつながっていきますし、それこそ「村社会」というものを悪いものとして決めつけてしまうことに対する別のフレームの提供という意味でもつながっていきます。

K…猪瀬さんが「むら」とひらがなにすることで、その意味を捉え直していったように、若林さんや畑中さんは「世間」という言葉の意味を改めて捉え直そうとされていますよね。

I…そうですね。

K…人がなんとか相互依存しながら生きている存在であるということ。それに、そのような状況を維持するための工夫が暮らしの中に埋め込まれていたということ。そういうところに目を向けられていますよね。それって、なんだかずっと会話をし続けるみたいなニュアンスとして捉えていたんですよね。

かけがえのないものを、かけがえのない形で分ける

I…それでいうと、きだみのるという人が「山分け」っていう概念を出しているんですけど。

K…きだみのる。山分け。

I…パリで文化人類学者のマルセル・モースに師事した人なんですけども、彼が言うには、狩に行つてその成果をみんなで山分けをするにしても均等に分けるわけではないんですね。でも山分けを行う瞬間において、分け合った人同士が「みな平等」に分けたという感情をもつ。その基盤として部落が存在すると、きだの『気違い部落周遊紀行』について論じた、上野俊哉さんが整理しています。この山分けにあらわれているのが、ただ唯一のかけがえのないものを、かけがえのない形で分けるということのように思います。

K…かけがえのないものを、かけがえのない形で分ける。

I…コロナ禍で、マスクが日本中の全世帯に2枚ずつ、それこそ均等に配られたじゃないですか。

K…ああ。

I…世帯ごとに置かれている状況は様々ですし、それぞれのマスクへの重要性というものは、いろいろなグラデーションがあるはずなんですけど、文句が出ないために均等に扱うという方法のなかでは、そういう個性は置いておかれる。

K…ああ。

I…均等と言えば、聞こえは良いし平等に見えるけど、その見方自体が歪んでいる可能性っていうのはある。災害時の避難所で全員分の物資がないから、誰にも配れなくなっちゃうという話もそうですよね。

K…ああ。そうした時に、そうじゃない方法、つまり均等じゃないけど納得を感じたり、みんなの合意というものが生まれたりしていくためには、何が必要になってくるんですかね。

I…そう。その山分けが進化したかどうかはともかくとして、それに近いけど、そうじゃない形っていうもので、今でも残ってるものがあるんです。よく行くんですが、岐阜の郡上八幡で行われている「頼母子（たのもし）」というもので。

K…頼母子。

I…同級生の集まりやら、地域の集まりやら、まちづくりに関わった人の集まりやらで、月に一回くらい集まって、呑み食いしながらその都度お金を貯めておくんですね。それで、その貯まったお金の「競り（せり）」をして、今日は誰が競り落とすかっていうのをやるんですよ。

K…お金の競り。

I…例えば、貯まった10万円をいくらで競り落とすかというのをみんなで作っていくんですよ。

K…え、じゃあ、10万円を1万円で買って手に

I…そこがまさに重要な話で、この人は今ここで困っているとか、こういう事情にあるっていうのが、オモテ面だけではなくて、ウラ面の口に出せないことも含めて分かっているというのが多分重要で。例えば、今でも我々が会議で決めるとき、なんでこんな歪んだ決定したのって思っても、その後の飲み会みたいな場で、いや実はあの人がこうなんだよって内部事情的なものを言われると。

K…そっかーって、納得しちゃう。

I…そうそうそう。ある程度全員がそれぞれの事情を良い感じに分かっている状態があると、納得する山分けの形が生まれるんでしょうね。

今も残る「山分け」

K…それぞれの事情というものが、ある程度ぼんやりとした塩梅だとしても了解されている状態。

入れるみたいなことが可能になるんですか。

I…そう。

K…スゴイ。お金をお金で買う。それこそ対価という概念が揺らいでいきますね。

I…例えば、家族が病気になったという人が出てきたら、競りというシステムを通して、その人にとまったお金を融通してきたようなんですよ。

K…競りではあるんですけど、貰うべく人がちゃんと貰えるようになっていくということなんですよ。

I…そうなんですよ。だから、狩をして獲物を山分けするといったことよりも、もうちょっとこう、うん、複雑にしちゃっているわけです。

K…その複雑さがあるから、えっと、御着せがましくない感じはあるかもしれませんね。

なかったんだけど、旅行の勧誘だけは始めて、もうその時点で亡くなられていたんですが、チシマくんと僕の共通の友人がいるんですけども、その方のお母さんにも声を掛けていて。さらには、「楽しみにしてる」なんて言われちゃったりするんですよ。それで、案外、準備をしていくうちに楽しくなっちゃって、旅行のしおりをつくる人が出てきたり、ギターを持ってくる人が出てきたりして、それこそ頼まれなくてもやっちゃうことが広がって、盛り上がったんですよ。

K.. 旅行のバス移動の様子ももう目的地に着く前からスゴい楽しそうですよ。誰かが持ってきたDVDを上映したり、高速道路網に詳しい人が解説をしたり、カラオケが始まったりと。

I.. そう。みんなで旅行に行くことができて、すごく良かったんですよ。旅行を主宰した団体は、見沼田んぼ福祉農園を一つの拠点として障害のある、ないなどの違いをこえて、農的営みとおして新たなつながりをつくりだすことをミッション

すが、まさにその見えてなかったものの一端も感じました。

「頼まれなくなっちゃったこと」で生まれること

I.. そうですね。ちなみに、今回のテーマである「頼まれなくなっちゃったことを祝う」ということと、「ボランティアってなんだっけ？」で書いたことを重ねつつ、頭に浮かんでいたエピソードというのが、この本の最初の方に出てくるチシマくんのことで。それこそ誰からも頼まれていないのに、彼がみんなで旅行をしたいって言い始めるという。

K.. なんとなく「伊豆に行きたいねえ」という会話が交わされる場所ですよ。福祉農園に関わるみんなが巻き込まれていくという。

I.. チシマくんは、日程も交通手段も宿も決めて

に、NPOという形で法人を立ち上げて運営をしているんですけど、やっぱり組織化したり、業務を合理的にルーティン化したりすることだけを、といった先には、事業をこなすだけであつたり、なんといか行政の下請でしなくなつて、安く使われるだけの存在になっていくということも危惧されるんですよ。だから、そういう意味でも、頼まれなくなっちゃったことだったり、ボランティアみたいな要素が結構重要で。

K.. ああ。

I.. なんていうのかな、もつとと言うと、頼まれなくてもやっちゃう要素というものが引き出される状況っていうのが、うん、すごい大事だなと思つていて、その時に、誰かに使われた感じじゃなくて、自分もよかつたと思える。

K.. ああ。

I.. 本には書いていない話なんですけど、この旅行

I.. そうそうそう。10万円を貰うために、1円から始まって競り勝って、それを買ったという手触りが残る。お酒を呑みながらですけど、競りが始まって「今日取るぞ」なんて宣言したりされたりして、今日は誰かなみtainな雰囲気になりつつ、「張り合っちゃうぞ」なんて言って競り合いを楽しんだりして、しかるべきところに着地させていくんですよ。

K.. 貰うとか買うとかが混ざっちゃって、なんだかスゴい不思議な気持ちになりますね。あーでも、貰ったとすると、貸し借りの負い目が最大化される感じがありますが、競り勝って買ったとすると、負い目が減る感じもあります。

I.. 良くできたシステムですよ。

K.. 猪瀬さんの「ボランティアってなんだっけ？」の中で、『対価』という言葉は、多くのことを見えなくしてしまう」というフレーズがあつたので

I…一緒に行く人のなかには、沖縄出身の人もいて、毒蛇に噛まれた時の情報もくれたりして、なんかよく分からないけど、みんなでママシリテラシーが高い状態で向かうんですよ。それでまあ、いろんな話をするし、お酒も呑んで楽しかったんですけど、前の旅行にも参加していて、この旅行にも行くって言ってただけど、やっぱりちょっとハードだから止めておくわってなっていた、70代後半の方がいたんですね。それで、その方がその年の秋に亡くなったんですね。もう一人、福祉農園でその方と仲良かった人も、その数カ月後に亡くなるんですよ。倒れてすぐ病院に入って、家族しか面会ができなかったりで、そのまま亡くなられて、僕たちはご葬儀も行ってなくて、その、なんかとか追悼の場もないまま、気持ちのやり場にくっついてたんですね。そうしたら、チシマくんとかご飯食べてるときだと思っんですけど、彼が「亡くなって、寂しいよね。お別れ会をしなきゃね」って。

K…チシマくん。

で、実は僕の家族が全員集まったんですよ。父と母と兄と妹のみんな旅行に行くことって、多分中学生以来、無かったんですね。それってこの仕切りだから成り立ったのであって、そうじゃなかったら絶対家族が揃うことはなかった。

K…ついつい集まっちゃう何かがあるところにあったんですね。

I…家族以外の人たちがいっぱいいるから、ある意味、パブリックな機会でもありつつ、だからこそ、家族の非常にプライベートな問題も一時的な回避が生まれて、集まれちゃった。プライベートな願いも叶っちゃった。一つのわかりやすい目的を共有して集ったというよりも、なんとなくはじまつたことに、それぞれがなんとなくあつまり、過剰気味にやれること、やりたいことをやり出して。まあ、うん、なんか楽しかったなと。

K…やっぱり楽しかったと。

I…そう。他のみんなも、こんな旅行かなり久しぶりで楽しかったって、夜の席も盛り上がりたんですね。来年もやろうって。でも、コロナでトーンダウンしちゃったんですけど。

頼まれていないことが、大切なことだった場合に

K…ソーシャルディスタンス。ステイホーム。

I…そう。それで、僕の職場の先輩が埼玉のときがわ町の山の上で暮らしてて、去年なんですけど、そこにみんなで行くかって、夏に10人ぐらいで行ったんですよ。そこは、火も全部、薪でやるみたいな状態で、さらにはママシがでるから長靴で来いとか、ムカデに気をつけろとか、注意事項もたくさんあって。

K…おお、旅行というか、サバイバルキャンプ。

I…彼は、なにかこう、うん、彼として、本当に寂しい気持ちで、こう素直につぶやくんですけど、それを言われて、こちらとしてはコロナのこともあるし、いろいろな都合考えちゃって動かずいたので、すこし苛立ち、事情を考えろよと思ったりもしたのですが、僕以外の人も含めて立て続けに「亡くなって、寂しいよね」って言われているなかで、ふと、いやこれは動かなきゃいけないなと思って思っんですけどね。それこそ、動くと言っても、誰からも頼まれていない。亡くなられていますから、本人が望んでいるかどうかとも分からない。ご遺族に頼まれているわけでもない。それでも、チシマくんが呼びかけ人になってお二人を偲ぶ会をやったら、参加者も結構集まって、二人が今までどのような活動してきたかって、そんなに縁がなさそうに見えていた人も含めていろいろな人が思い出を語ってくれて。

K…ああ。

I…普段あまり喋らない福祉農園のスタッフも、



教育領域の仕事をしてきているんですが、いわゆる定型発達というものが前提になっていて、教育というものを、できることをほとんど増やしていきたいと思います。息ましようつていうことだけで捉えることに、息苦しさを感じていて、まさにという気持ちにもなりました。僕の息子は足が不自由になる難病を抱えているのですが、ある意味それだけのことと、とあえて言うんですが、定型発達を前提とした教育空間では、もう構造的にとたんにやりづらくなるところがある。人と人との間に、序列やヒエラルキーが、すぐ入り込んでくる。注意をしないと、教育というものがまさに健常者だけの営みとして定義されてしまう。

I.. そうですよ。

K.. 猪瀬さんの書籍を読んだり、お話を伺っていると、本来、人ってこうやって生きてきたんじゃないかっていう気分になってくるんですね。こうやってというのは、人と人が、できるだけ良い塩梅で、ということなんです。



あの二人から教えられたことがあるとか、あと、お一人の方は30歳過ぎてから定時制高校に通われていたんですが、その時の教頭先生もいらっしやあって、やっぱりその人から教えられたことがあるって、いろいろな話をされていて、とにかくなんか良い時間になったんですね。農園の日々の運営のことしか考えられていない状況の中で、そこでずっと働いてきた方が亡くなられた時にちゃんと大切にすべき時間を迎えるためには、だから、そのチシマくんのつぶやきが結構大切に。

K.. チシマくんのつぶやき。

I.. チシマくんって超重要だなんて思っていたのが、「ボランティアアってなんだっけ？」を書くとしたときにも、かなり念頭にあって。というのも、強いリーダーシップで事を成していくことも、もちろんスゴイと思うんですけど、一方で、なんというか強烈な意識と覚悟と知性で動いているわけではなく、普通の人が、やっちゃう、始めちゃうこととか、それに巻き込まれていっちゃうなかで、

生まれていくことって、やっぱりたくさんある。むしろ、そういう、広がりのあるところを語りたかったんですよ。何気ないチシマくんの、そういうつぶやきでも、自分のどこかの想いと重なっている。そういうところから考えるボランティアって。

K.. 何気ないつぶやきから、実際に現実を動かしてしまう。現実が動いてしまう。

I.. やっぱりチシマくんに巻き込まれたからこそできてしまうことっていうのは、たくさんあるなって思うし、その意味でボランティアだったり、「頼まれなくてもやっちゃうこと」っていうのは、すごい大きなこともあれば、もちろん些細なことだってたくさんあるはずだし、そもそもそう捉えておかないと、そういうものが生活に余裕がある健常者だけがやる行為という定義になっちゃうんですよね。

K.. ああ、僕は基本、ワークシヨップというか、

誰かを思い通りにしようとする暴力と、それを破壊する暴力

I.. これは「野生のしっそう」で書いたことにもつながるんですけど、哲学者のヴァルター・ベンヤミンが、「神話的暴力」と「神的暴力」ってことを言っているんですよ。

K.. 暴力。名前は似ていますけど、その二つは違うものなんですか。

I.. はい。異なるものとしてベンヤミンは考えていて、神話的暴力っていうのが、法指定暴力と法維持暴力というものに分かれるんですけど、例えば、戦争で侵略をした国が侵略先の国のルールをつくったり領土を定めたりするのが、法指定暴力。その後、それを警察とかによって管理するというのが、法維持暴力。そのどちらも、つまり神話的暴力というものは歪んでいるっていうのがベンヤ

ミンの問題意識で。

K…ああ。ルールなるものを破ったら罰せられるけど、その罰する力というものも、言ったら暴力の一つで、さらには、そもそもなんでそのルールを守らないといけないのか、誰がなんの権限でそのルールを定めているのか、そこにも言ってしまうと、暴力があると。

I…はい。それで、その上で出てくるのが神的暴力。そういった神話的暴力を根源的に破壊するものを、神的暴力って言うんです。ただ、その神的暴力が何でも壊していいっていう状態になると、それ自体が圧倒的な暴力としてヒエラルキーを生むことになるだけなので、ベンヤミンはそこから、その神的暴力が、要するに制度化しないためにはどうしたらいいのかっていうのを考えるんです。

K…ああ、制度化という暴力を破壊する、非制度的な暴力が、ある意味倒した敵と同じような制度になってしまわないためには、という問いがそこ

K…ああ。そういう「しっそう」を通して、つまり神的暴力があるからこそ、そこにあった神話的暴力に気づかされていくというニュアンスもあります。

I…そう。ただ、かといってそれが、「コロナは気にしないで良いんだ」という規範の押しつけになってしまうと、それは新たな神話的暴力になるわけですよ。だから、それを、あくまでもその神話的暴力が一時的に機能しなくなる状況をつくった神的暴力として捉えることが大切で、「みなさんそれに倣いましょう」っていうことではやっぱりない。それをマニュアル化したり、SNSとかで「知的障害の人はみんな自由に生きていいですよ」とか「思いついたらすぐ外に飛び出していいんですよ」って言って、それが反復すべき正しいものとして語り始めた瞬間に、それは神話的暴力になるんで。

K…ああ。変にヒーロー化させないというか、ご自身の語り、神話的暴力を孕むことを回避する

にあるんですね。制度の再生産のループからどうはずれることができるか。言うなれば、独裁政権を打倒した革命運動が、同じような独裁体制になってしまうところをイメージしてしまいます。

I…そう。そういうときに大事なのは、いわゆる「サバルタン」とも呼ばれる、声なき存在のもっている力であるとベンヤミンは言うんです。

K…声なき存在のもっている力。

I…「野生のしっそう」では、まさに兄が「しっそう」するというのが、神的暴力としてある。つまり、知的障害者でもある兄が、お金を持たずに移動してしまうというのは、ある意味、法を逸脱しているという話でもあり、コロナのなかで、「都道府県の境を越えてはいけません」であるとか、「必ずマスクをしてください」という法指定のような状態のなかで、それを相対化するような「しっそう」なんです。

ためにはどうしたらよいかということを強く意識されていたということですか。

I…はい。やっぱり、なんか、その、だからこそ、兄の行為を一回きりの再現不可能なものとして書く必要があったんですね。

自分色に染めてしまわないために

K…再現不可能で一回きりであるということが了解されれば、「それに倣いましょう」っていう気持ちにそもそもならないということですよ。あの、えっと、ちょっと意地の悪いような質問になってしまうのですが、「ボランティアってなんだっけ？」という書籍を、例えば関わっていらっしやる福祉農園のボランティアの方々みんなに読んで欲しいという気持ちになったりはしないんですか。

I…読んで欲しくはありますけど、みんながみんな読んでいたり、好意的だったりすると、それは

それですごい気持ち悪い状況になってしまったり、読んでくれていたとしても印象が良かったり悪かったりと、まちまちのほうが安心するんですよ。

K…コントロールしようとする気持ちを手放しているとは。

I…自分が知らないところで、いろんなことが勝手に起こっていたり、人のつながりが勝手に生まれている状態を喜べる状況にしておかないと、やっぱりヒエラルキーが生まれてしまう。ヒエラルキー化させないのはすごく大事で、油断するとそうやってしまうっていうのはありますよね。僕自身も30代の頃までは、もっと、こう、全てをコントロールしようとしていたり、全てを把握しようとしていたように思うんですが、40代になって考え方が変わってきたような感じはあります。

K…油断するとヒエラルキーが生まれて、さらにはそれが固定化しちゃうから、とにかくそうならないように工夫するという人種の叡智ってあります。

グレーバーの「民主主義の非西洋起源について」とかを踏まえてやっていくという。それってつまり、人と人との間にヒエラルキーを持ち込まないためのリーダー論のようなもので、だから、その、知的障害者でもある兄が代表をやることで、むしろもっと多様な声を受け止められる状態をつくれないうか。

K…生きることと研究することが、溶け合ってどっちの話を聞いているのか分からなくなるというかなんというか。

I…まあ、はい。そういうえば、文化人類学者の松田素二さんたちが、アフリカの「パラヴァー(palaver)」という習慣を研究しているんですけど。

K…パラヴァー。

I…言ってみるならば、MCみたいな人がいて。

K : Master of Ceremony。

すよね。先程の頼母子もそうですけど、人間関係の束のような、人の集団のあり方をどうにか健康かなものにしていくための工夫というか。

I…はいはいはい。実は、「野生のしっそう」の後編があるんですよ。最終的にはホントはそういう民主主義論にいくはずだったんですよ。

K…なんですと。

その場に参加すること自体が一つの喜びであるような会議

I…農園で言うのと、うちの親父は強い代表者としてずっといて、だから行政に対しても首尾一貫した強い主張ができてきたわけなんです。でも、年も重ねていくし、人ってずっと強くあり続けられるわけでもない。だから、その強い代表というものではない場合に、農園という人の集団がどのようにして成り立っていくのかということころを、

I…村で決め事をするときに、村人が広場に集まって、それで語り合うんだけど、そのMCみたいな人が、意見が対立している陣営にそれぞれ語らせたり、その都度、冗談を言ったり雑談を挟みつつ、あんまり喋ってない人にも喋らせたりしながら、昔はこうだった、ああだったみたいな話も集めつつ、その場を盛り上げていく。そうこうしているうちに合意形成がなされていくというものなんです。ね、パラヴァーって。

K…へー。

I…詳しくそうなる人に聞いてみたら、「そんな理想とおりにはいかないですよ」って言ってたんですけど、でも、会議みたいなものも、多数決であっさり決めるとかではなくて、その場に参加すること自体が一つの喜びであり、アイディアが湧き、なんか楽しいってこういうイベントのようなものとして考えられないかなって。

ともに死にゆく存在であるという次元での
了解と賭け

K…で、猪瀬さんが書籍で書かれている「かけがえのなさ」というものが、人と人との会話を成り立たせているものとして重要な位置にあるというか、それが会話というものを支えているような気がするんですね。猪瀬さんの書籍って、脚注もかなり面白くて、脚注を読んでいくことによって、もっと知りたくなった時の参考文献が分かるのもそうなんです。いろんな伏線が回収されていくようでもあって。それで、えっと、「野生のしっそう」の脚注では、『異質なものととの出会いの場としての個体』のかけがえのなさを念頭においている」とあるんですね。

I…それと言うと、その本でも書いたんですけど、コロナの脅威っていうものが叫ばれはじめた頃、

ファシリテーションの非西洋的起源

K…うはあ。ホントそうですね。先程話にありました。もう20年くらい前でですけども、もともと僕は、子ども向けのワークショップの仕事をしていたんですね。それで、自分の立場はファシリテーターと呼ばれるようなものにもなっているわけです。周りのファシリテーターの人たちは結構、「先生じゃなくてファシリテーターです」という形で対比を強めてその存在意義を語っていたんですが、じゃあ、それはなんなのかということころの深堀りというか、腹落ちを自分にさせたくて、「民主主義の非西洋的起源」ならぬ、ワークショップやファシリテーションの非西洋的起源なるものを考えてきたという感覚があるんですね。

I…まさにですね。

K…そうなんです。それで、パラヴァーはアフリカですが、サモアには、トーキングチーフという

村の話し合いをつかさどる立場の人が村長とは別にいるようで、インターネットで画像検索すると、杖とか持っていてなんかカッコいいんですね。それで、その話し合いの場の回し方もそうですね。そのトーキングチーフの人となりというか生活の様子が普段からみんなに見られている。まあ、だからこそ妙な説得力もあってたりして、「あいつがそういうなら」であるとか「あいつが聞いてくれるから」という感じで、「じゃあ、自分も本音をしゃべろう」となったり了解がなされていく。これ、あくまでも推測や想像も入っているんですけども。

I…でも、まあ、きっとそんな感じなんだと思うんですね。

K…なんかですね、話をしたりされたりという、話し合いの場って、シンプルではあるものの、結構繊細なものでもあるように思っていて、そういうものをみんなで大切に育んでいこうよという合意形成が、その話し合いでもたらすべき合意形成というものの手前にあるような気がするんですね。

「コロナウィルスを撒き散らすぞ」って、自分が暮らす街のスナックとかに行って騒いでいたという愛知県のおじさんのことがすごく気になっていて。

K…ああ。

I…テレビやSNSで、叩かれてて。それで、そのおじさんはもともと重い持病を患っていて、その数日後に亡くなられるんですね。その飲食店は営業自粛をせざるを得なくなったり、その従業員の間で感染者が出たわけですから、「コロナ陽性者がマスクもつけないで酷いじゃん」というのは非常に正しい主張ではあるんだけど、一方で、家族もいない状態で一人で部屋で寝ていた時に、死を目前にして社会のことは考えられず、誰か顔の見える他者と出会いたいという衝動を抱えるのは、共感できるものがあるなと思ってしまいますよね。自分自身という、この存在がなくなってしまうときに、一見社会的に見ると不合理なことをやってしまうっていうのは、あり得るよなって。だからといって、みんな好きに振る舞って良

いよってという話でもなく、一旦、善悪というものを宙吊りにして、なんとというか有限の時間を生きている人間同士としたときに、共感できるところがやっぱりある。それはなぜかって言うと、死に直面する存在として、そして死を運命づけられた存在としての僕自身とそのおじさんというものが見えてくるからで。その意味において、やってることの行動は理解できないけど、そういう次元ではかなり共感できてしまう。だから、なんていうか、その人との接点が少なくともそこだけにはあるっていう。

K…ともに死にゆく存在であるという。

I…そう。それが、それぞれのかけがえのなさということで、そういうふうに捉えた上で、ボランティアっていうものが、やむにやまれず、誰から頼まれもせずにやった行為ではあるけれど、だからこそ、独りよがりとか、自己満足とか、おせっかいとも言われるけども、そう言われることも引き受けて、でも、ともにあろうとすることに、な

んか、うん、それはもう、そこに賭けるとしか言えないわけですけど。

K…賭ける。

I…うん。やっぱり対価ってことになっちゃうと、報酬としてのお金が発生したことによって、そもそも自己満足とも、おせっかいともあまり言わない。ある意味でいうと、お金とともに関係性も精算される。関係性が精算されて閉じられるから、お互いのかけがえのなさのなかで何かを賭けるという意識にはならなくなるわけです。

K…ああ。より良い状況が生み出されることを願って、自分の存在をまるごと投じていくような賭け。

I…クリエイティブなことってというのが、そもそもそういう「頼まれなかったってやっちゃうこと」であるというのは、そういう意味もありますよね。賭けだから、大失敗もある。だから、そういうときは、ちゃんと謝るとか、やり直すとか。

共犯関係

K…ああ。賭ける、賭けられる。謝る、やり直す。それを受け入れる。なんかそういう、共犯関係というか、相互作用ってあると思うんですね。そのあたりも、猪瀬さんの書籍を読んで気づかされたんですが、「頼まれなかったってやっちゃうこと」やボランティアのようなことを、個人の自発性や能动性というものだけに根拠に置いておくと、例えば大失敗したときに、その個人が個人のままだに全ての責任を背負わされて、梯子が外される。社会のセーフティーネットが機能しない。そういうことになると、報われないし、誰もそういう賭けはしなくなりますよね。だから、自発性とか能动性といったものを、個人で独り占めされるものではなく、他者と分け合うものとして考えていく必要があるんじゃないかなって思うんですね。それを共犯関係と呼んでみたんですが。

I…そうですね。チシマくんの話でいうと、チシマくんの声が聞こえたというか、聞こえる関係

があったっていうのもあって。チシマくんのささやかな能動性があるとともに、それを受けて動いてしまっている人たちがいるっていう。とはいえず、聞こえるといっても、多くのことは無視されていると思うんですね。僕も聞こえたことだけを言っているものであって、多分たくさん無視していると思うんです。でも、そういう声が聞こえてくる関係にあるという土壤のようなものっていうのは、やっぱりある。

K…土壤。ああ、そういう土壤のようなものを祝いたいという気持ちがあるのかもしれない。先程から度々出てくる民主主義というキーワードに引き付けていうならば、それこそ強いリーダーが強い言葉で語るというスタイルもある一方で、それがささやかだとしても、やっぱり耳を傾け合うという人間関係というか、民主主義のあり方ってあるよなとは思っています。

「不揃いの調和」を祝う

I… 祝うということかというと、熊井さんとしては、祝いというものをどうイメージしてたんですか。

K… それこそ、猪瀬さんの書籍にあった、かけがえのなさを巡るフレーズにそれを感じていて、えっと、例えば「耐えきれない切なさに対峙しているもの同士として、孤独なわたしたちは初めて、それぞれの世界を重ねることが出来る」という、その重なり祝福を想うんですよ。ちなみに今回のこの冊子は、渋谷キャストという複合施設の7周年を記念して制作するのですが、その渋谷キャストの建築デザインのコムセプトが「不揃いの調和」というものだったんです。玉井美由紀さんという方による言葉なんです、すごく素直な気持ちで感じていたのが、それって平和なことだよなっていうものだったんです。

I… なるほど。

とバラバラなんだけど、一番根底のレイヤーで見ると一致しているといったようなもので。

K… まさにそうで、そういう「不揃いの調和」を祝い続けていくために、毎年その言葉を言い換え続けて、解釈を豊かにしていきたいという気持ちになってるんですね。それこそ、毎年そうすることで見えてくるなにかがあるんじゃないかという賭けなんですけども。

I… 雑多なものが集まることで、ともにある他者をまらごと祝福できる瞬間というものをこの社会につくれると、やっぱりいいですよねぇ。

K… ホントにそうなんですよね。そこに尽きるみたいないところがあった。さらに欲張って考えるのは、その他者ともにあることの祝福というものを、祭という機会でしか焦点化しないというのもやっぱり話が違うような気もするということなんですね。いろいろとお話をうかがって考察を深めていくなかで、日常の営みにおいてそれがいか

K… だから、「不揃いの調和」って、建築様式として様々なマテリアルが複合的に用いられているという状態を指してはいますが、同時に、それを社会に対しての願いとしてしっかりと受け止めるべきだなと、ずっと思っていて、今回はそれをある程度明確に打ち出したいという気持ちがありました。なので、渋谷キャストの周年を祝うということとは、つまり「不揃いの調和」を願って、それを祝うということでしょうって。というところもあるから、今回猪瀬さんのお話をお聞きしていて、その気持ちが裏打ちされていくようでもありました。

I… この前、とあるトークイベントでお話をしていた時に、一緒にお話をしていた方が「他者という存在への無条件の祝福」ということをおっしゃっていて、熊井さんとお話をしているとそういう感覚にもなります。なんというか、それこそ均一的な正しさが一つだけあって、それに同一化する形での祝いや祭があるというよりも、バラバラなんだけど、まさに他者同士なんだけど、でもなにかこう、ともにあって、それはあるレイヤーで見ると

に難しいのかというのが、逆に突き刺さってくるという感覚があるも正直なところなんです。

I… それはね、熊井さん。そういう問題意識をもにするとという意味で紹介したい人がいて、僕はマシューくんって呼んでるんですけど、今は、上野のアメ横で魚屋をやっているんですね。

K… マシューくん。お魚屋さん。

I… 彼は、大学院のときの後輩なんですけど。

K… ほう。

I… それで民俗学をやっていて、秋田の西馬音内(にしもない)という盆踊りの研究をしていたんですね。それって日本の三大盆踊りの一つと言われていて、ものすごくいたくさんの見物人を集めているわけなんですけど、普段はスイカとかをつくっているいわゆる普通の人がお祭りの瞬間に脚光をあびるということに感動しちゃったらしいんですよ。

それで、アメ横でカニだかなんだかを売るバイトをしたら、それと同じ状況を感じちゃって、大学院を辞めて魚屋になったんですよ。

K…なんだか胸が熱くなります。

I…さらに。

K…さらに。

I…彼は、「じゃがたら」っていうバンドが好きで、それがきっかけで大学生の時に横浜の寿町のフリーコンサートに出入りするようになって、その運営もやっていたようなんですね。それで、日雇労働の人たちと、外から寿町に来た人たちがみんな歌っているというそのフリーコンサートのDVDを、熱い涙を流す彼の横で僕も観させられるっていう。

K…なんだか胸にこみあげてくるものがたくさんあります。

I…どうでしたか。

K…舞踏家の大野一雄が、慶應大学の新入生歓迎会でパフォーマンスやレクチャーを毎年するという時代があったそうなんですけど、それがマシユークンにとってカミナリに打たれるような体験になって、芸能というものを考えていく。それが、今のアメ横での活動にも紐づいているという感じはかなりグッと来しました。都市というものが、人が生きるということの舞台にちゃんとなっているというところはどうかと考えると考えさせられます。それと、居心地の良さと居心地の悪さの、その両方をお店づくりでも大切にしているというお話をされていて、居心地の悪さを感じるくらい「わからなさ」がないと、人が自分以外の他者への想像力を働かせなくなってしまうって。まさにいかに「不揃い」のまままでいられるかという。

I…そうですね。話が尽きないですね。

I…それでまあ、多分アメ横で初めてだと思うんですけど、呑める魚屋という業態を彼は自分でやり始めて、今じゃテレビ番組にも良く出る人気店なんですけど、原点にはそういうことがある。熊井さんと話をしたら何かが生まれるかもしれないです。

K…え、もう、すぐ行きたいです。

△付記▽

K…というわけで、すぐ行っちゃったわけですけど、マシユークンのお店である「魚草」に。ほんとありがたうございました。

I…チシマくんも楽しかったそうですね。

K…話に登場していた方々に会えたことも、かなり嬉しかったですし、話も盛り上がりましたね。

K…きつと、その尽きなさも、わからなさも、それがあるからなんかこう、気持ち動くところとかやっぱりあるなって。ああ、それと、猪瀬さんの本を読んだり、取材をしたり、「魚草」でお話をしていても感じたんですけど、具体的な描写が終わり知らずに連なるお話に、なんというかそういうことでしか描けないものがあるんだという気持ちになってきました。

I…かけがえのなさというものを描くためには、やっぱりそうでもしないと。

K…ああ。ほんと話が尽きないですね。

頼りない一人がおおずとおおずと始めてしまったことを周りが受け止め、彼だけでなくその周りにいる人たちの声や、自分自身の内なる声に耳を傾けるなかで始まることもある。そうやって始まったことが、様々な形で反響を呼び、そしてかかわった人たちにとって大切な動きになっていく。頼りないハ私Vたちが、お金の力に頼ることなく、国や大きな権威にお墨付きをもらうこともなく、自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕はハ自治Vと呼びたい。自治とは、誰かに支配され、コントロールされたり、誰かに所有され管理されたりはしない、自分やほかの生命を大切にしたいと思うハやさしさVから生まれる。

(猪瀬浩平「ボランティアってなんだっけ?」より)







只の水はあまか
宇井 博

・気遣い 船屋船行 せいの
宇井 博

了り方潜在力が世界を奪える
Blessing, Incompleteness
あまかみ せいの

ガククは語るに及ぶか
C. G. Jung 著 宇井 博 訳

暴力知識
宇井 博 著

アノ、区
宇井 博 著

思想の不良なる
上野 俊 著

字の心
小松 一 著

むじと原莞
野上 公生 著 宇井 博 訳

野上のしごと
猪瀬 浩平 著

分解者たち
最澄 隆 著 宇井 博 訳

世界の非階級化
宇井 博 著

1階革命
山本 隆 著 宇井 博 訳

組織の境界
宇井 博 著

ミヤコ
宇井 博 著

1917年
宇井 博 著

貨幣論
宇井 博 著

二十世紀資本主義論
宇井 博 著

資本主義の階級
宇井 博 著

密かに日本を支配する
宇井 博 著

実験の民主主義
宇井 博 著

若林 恵
もたらぬ来 2010-2017



東海林広太「パンザマスト」より

頼まれなくなつてやっちゃうことを祝う
 ということがいかに必要か

目指すところがある。ならば、そこに至る過程もその目指すところと同じようでありたい。そのように常々考えていました。頼まれなくなつてやっちゃうこと。それを祝うことを目的とするこの冊子をつくる行為そのものも、その頼まれなくなつてやっちゃうことというものを孕んでないと嘘になる。そう感じていました。結果的にどうだったか。田中元子さん、若林恵さん、猪瀬浩平さんの胸を借りる気持ちで突撃すること。それって、なんならお金を払ってでも体験したいこと。それをじつのところ、お金を頂いてやるという、なんとも有難いものでした。かといって、仕事のほとんどはそうあるべきだという気もしてしまふ次第。だって、たとえば野菜一つにとってしたって、その野菜や土や生き物や作り手に惜しみない気持ちを注いでいる人から手にしたいと思うから。

というように、この仕事にのめり込むような気持ちを突き動かしていたもの。それは、やっぱりなんだかんだけ渋谷キャストという施設の七周年という節目の一端を託されたということが大きいように思います。多くの方の鋭意によって立ち上がったこの施設は、つくった人の寿命を超えて街に存在していきます。であるからこそ、そのような場所の周年祭というお祭りを考えるということは、重責この上ない。と、素直に感じます。ただ、良い街ってなんだろうということを考えてと、この託し、託されるという営みが、健康的で活発に行われている状態なんじゃないかという気にもなります。

頼まれなくなつてやっちゃうことを祝うということが、なぜ必要か。「頼まれたくたつてやっちゃうことこそがクリエティブ」であるし、「未来の奴隷にならない」ようにしたいし、「自分やほかの生命を大切にしたいと思う」やさしさから生まれる「自治を手にしたい」。田中元子さん、若林恵さん、猪瀬浩平さんの文中のキーワードを抜き出してお借りするだけで、なにかこう深く身に迫ってくるものがあります。私自身も繰り返し読み返したいものでもありますし、この冊子を手にとってくださった方にとっても、大切に引き続きたい一節があることを心から願っています。

さて、この冊子はページをめくっていくと、絆創膏のモチーフや寝室の写真が、やや突然ともいえる形で挟まれています。どこかにその理由を記して留めておきたく、この場をその機会に。星のようにばらばらとあったものが、星座のようにつながっていく。結局のところ、取材先の3名の方々の言葉はもちろんのこと、写真家の東海林広太さんの作品や詩人の吉野弘さんの文章が、この間の自分にとって星のようなものであって、関係者とともにそれを眺め話するような時間を重ねてきました。

創造の創が「きず」だということは意外に知られていないようです。
(絆創膏という薬もあることです。)

創造の創は、もちろん「物事の始まり、始め」という意味ですが、
物事の始まりが「きず」だということは大変意味深いという気がします。

吉野弘 「詩のすすめ 一詩と言葉の通路一」より

創造の創は「きず」である。考えてもみなかったことですが、自分の足場と見通しがひらかれたような感覚になりました。創造性なるもの、クリエイティブティなるものが大切というならば、その「きず」性というものに目を向けると、あまりにも都合主義になってしまうのではないか。「きず」が付かないような高みで創造性というものを語ってはいけないのではないか。関係者一同の寢床の写真が掲載されているのは、そのような態度の現れであり、それを掲げ続けるためのモニメントのような記録としてでもあります。寢床に身を預けるほかない状況は最も無防備なもの。にも関わらず、それを晒す。頼まれなくなつてやっちゃんこと。それは「きず」ついたり、つけたりする私たちの人生そのものと思わず顔を覗かせる瞬間なんだと思います。そして、誰もが眠りにつくように、誰であれ分け隔てなくそのような瞬間が訪れているはずですし、まだ見ぬ訪れも待たれているはずです。

SHIBUYA CAST: 7th Anniversary memorial booklet

「頼まれなくなったっやっやっやっことを祝う」

企画・聞き手・編集・熊井晃史

デザイン・・・上妻森土

編集協力・校正・・・日比菜那

powered by 渋谷キャスト

